



◆其の八十一
ピカピカに光っていた
あの頃

歴史博物館の目玉展示のひとつ、「弥生時代の青銅器」。今でこそさびて青緑色をしています。造られた当時は黄金色や白銀色に輝いていました。

弥生時代に大陸から青銅器が伝わるまで、目を引く光ものとしては黒曜石で作った石器やメノウ、ヒスイなどで造った装飾品(勾玉(まがたま)など)がありました。太陽の光を受けた金属の放つ輝きは直視できないほどのまぶしさで、それまで体験したことのない強烈なインパクトを人々に与えたことでしょう。

しかし、それは、驚きや憧れとともに、「おそれ」をも感じさせたのでしよう。青銅器はやがて実用品から儀式用の祭器へと変わっていきます。

博物館の青銅器は、光が丘団地造成に伴う発掘調査で出土した銅

戈(どうか)です。「戈(か)」は古代中国由来の武器ですが、出土したものは「刃」がなく、大型化しており武器として使えるものではありません。おそろく、ムラの祭りに使われていたのしょう。



博物館展示の銅戈

現代でも、刀剣や鏡などが神社の御神体としてまつられているように、金属のまばゆくも妖しい輝きは人々の心をつかむものなのかもしれません。

二千年の時を経て、その本来の輝きは失われましたが、弥生時代の「ちくしの」人たちが驚きやあこがれ、ときにはおそれさえ抱いた「青銅器」。ぜひ博物館に来館して、実物をご覧ください。

☎文化財課

